中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会国語ワーキンググループの配付資料を掲載しました

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/107/siryo/mext_00010.html

記事ページ本文

現在位置
トップ
>
政策・審議会
>
審議会情報
>
中央教育審議会
>
初等中等教育分科会
>
教育課程部会 国語ワーキンググループ
> 教育課程部会 国語ワーキンググループ（第10回） 配付資料
教育課程部会 国語ワーキンググループ（第10回） 配付資料
1．日時
令和8年5月29日（金曜日）13時00分 ~ 15時00分
2．場所
WEB会議と対面による会議を組み合わせた方式
3．配付資料
議事次第 (PDF:95KB)
【進行資料】国語ワーキンググループ（第10回）の流れ（イメージ） (PDF:330KB)
【資料1】第10回国語ワーキンググループの検討事項について (PDF:1.3MB)
PDF形式のファイルを御覧いただく場合には、Adobe Acrobat Readerが必要な場合があります。
Adobe Acrobat Readerは開発元のWebページにて、無償でダウンロード可能です。
ページの先頭に戻る
文部科学省ホームページトップへ

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
国語ワーキンググループ（第 10 回）
議事次第

１．日時：令和８年５月２９日（金）１３：００～１５：００

２．場所：文部科学省東館５Ｆ６会議室
※ウェブ会議と対面による会議を組み合わせた方式

３．議題：
（１）高等学校国語科の科目の在り方について
（２）高等学校国語科の目標、高次の資質・能力について
（３）その他

４．配付資料：
進行資料　国語ワーキンググループ（第 10 回）の流れ（イメージ）
資料１　第 10 回国語ワーキンググループの検討事項について

国語ワーキンググループ（第10回）の流れ（イメージ）

令和８年５月２９日
教育課程部会
国語ワーキンググループ
進行資料

1 開会

13:00～13:01	進行上の確認等

2 高等学校国語科の科目の在り方について

13:01～13:10	事務局より説明
13:10～13:55	意見交換

～休憩（５分）～

3 高等学校国語科の目標、高次の資質・能力について

14:00～14:15	事務局より説明
14:15～14:59	意見交換

4 閉会

14:59～15:00	次回以降についての連絡等

令和８年５月２９日
教育課程部会
国語ワーキンググループ
資料　１

第10回国語ワーキンググループの議題

議題（１）　高等学校国語科の科目の在り方について

議題（２）　高等学校国語科の目標、高次の資質・能力について

議題
（１）

高等学校国語科の科目の在り方について

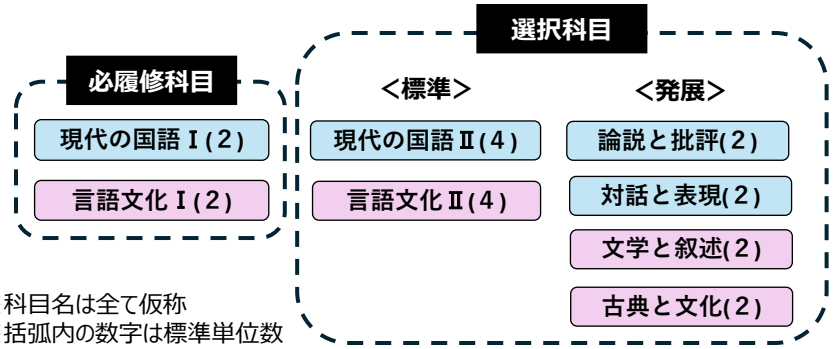
議論の前提

- 第９回WGでは、高等学校国語科の現状と課題を踏まえ、下記①②の観点について具体的な見直しの方向性を提示し、ご審議いただいた。

①科目について

- 論理的思考力、感性・情緒の両面について、二項対立に陥らず、バランスよく統合的かつ効果的に育成する方向性の下、
- 必履修科目は、現行の枠組みを維持しつつ、科目の目標に即し学習内容を明確化することで、指導の更なる充実を図る。
- 選択科目は、多様な話や文章に触れる機会を確保して学びの偏りを解消するとともに、生徒の興味・関心に応じた選択を可能にする。

【具体的な科目案】



※科目名は全て仮称
※括弧内の数字は標準単位数

※「現代の国語Ⅱ」では「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域を偏りなく学ぶこと、「言語文化Ⅱ」では古典と近代以降の文章を我が国の言語文化として学ぶこととし、選択科目として身に付けさせたい国語の力をバランスよく標準的に学ぶ科目として位置付けた。
※その上で、上記「Ⅱ」科目の履修を前提に、より発展的に内容を焦点化して学ぶ選択科目群（「論説と批評」「対話と表現」「文学と叙述」「古典と文化」を２単位相当で設定し、生徒の興味・関心に応じた選択を可能にする科目構成として示した。

②教材の扱いについて

- 論理的思考力、感性・情緒の両面をバランスよく統合的かつ効果的に育成するためには、多様な種類の話や文章に触れることが重要であることを踏まえ、教材の選定に当たっては、科目の趣旨に合致するかどうかで判断する。

- また、
- 〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域の資質・能力を「話や文章の機能（仮称）」によって焦点化して整理することにより、各科目の趣旨に沿った学びを充実させること
- 今般の教育課程の柔軟化の仕組み（単位の倍化、増単・減単をきめ細かく可能とする等）の下での科目の取り扱いについて、多様性の包摂の観点も含め検討する必要

➡本日は以上①②の方向性について、前回の委員意見等も踏まえ再考した見直しの方向性（次頁）について、ご審議いただきたい。

【第９回WGでの委員からの主なご意見等】

- 選択科目の標準科目が４単位だと、選択科目の発展科目まで履修できる学校はほとんど無くなってしまうのではないか。2単位にして、様々な形で組み合わせることが可能な設計にするべきではないか。
- 「文学と叙述」は、文学を鑑賞、批評、創作するという内容であることを踏まえると、「叙述」ではなく「創作」や「創造」といった名称の方がよいのではないか。
- 「古典と文化」の名称について、他の選択（発展）科目と位相が揃っていないのではないか。（その他の科目は、「○○と○○」の前半は対象とするものを示し、後半はそれをどうするかという行為を示しているように理解。）また、古典は文化に内包されるものであると考えると、「○○と」という形で繋ぐのは適切ではないのではないか。

第９回WGの議論を踏まえた見直しの方向性

- 生成AIが飛躍的に発展するとともに社会の多様性と分断の危険性の双方が増すことが想定されるこれからの社会においては、自らの考えを言葉にし、論理的かつ説得的に表現し対話する力や、多様な他者の感性や情緒を理解するとともに、それらを通じて自らの思いや経験を効果的に表現する力、他者と協働して考えを深める力など、人間ならではの言語能力の育成が必要。
- これらを踏まえ、現行の趣旨は維持しつつ、**論理的思考力、感性・情緒の両面**について、二項対立に陥らず、**バランスよく統合的かつ効果的に育成**することを図り、以下のように見直しを行ってはどうか。

①科目について（**補足イメージ１**参照）

＜必履修科目＞：現行の枠組みを維持しつつ、科目の特質に即し学習内容を目標で明確に示すことで、指導の更なる充実を図る。

- **科目の目標の明確化**
  - 「現代の国語」：実社会で必要な論理的思考力やコミュニケーション能力を中心に育成
  - 「言語文化」：多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を中心に育成

※新科目名は、「現代の国語Ⅰ」「言語文化Ⅰ」

これらの科目の特質を目標で明確に示すことで、どの資質・能力の育成に重きを置いているかによって科目を分けているということを明示し、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導の充実、言語文化を継承する態度の育成等、各科目での課題改善を引き続き図る。

＜選択科目＞：多様な話や文章に触れる機会を確保して学びの偏りを解消するとともに、生徒の興味・関心に応じた選択を可能にする。

- **論理的思考力、感性・情緒の両面をバランスよく育成する機会の確保**

選択科目（「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」）の中から、標準的な内容項目を抽出し、

- 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域を偏りなく学び、主として実社会で必要な論理的思考力やコミュニケーション能力を育成する４単位科目(「現代の国語Ⅱ」)
- 古典と近代以降の文章を我が国の言語文化として学び、主として多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を育成する４単位科目（「言語文化Ⅱ」）を大多数の生徒の履修を想定した選択科目として新設することで、学びの偏りを解消し、資質・能力をバランスよく育成する。

- **生徒の多様性に応じた選択が可能となる科目の設定**

上記「Ⅱ」科目の履修を前提に、より発展的に内容を焦点化して学ぶ選択科目群（「論説と批評」「対話と表現」「文学と叙述」「古典と文化」）（２単位相当）を設定し、生徒の興味・関心に応じた選択を可能にする科目構成とする。

左記の方向性について、

※選択科目の標準単位数の設定や各科目の履修順序については、今般の教育課程の柔軟化の仕組み（単位の倍化、増単・減単をきめ細かく可能とする等）の観点も踏まえて検討してはどうか。

→**補足イメージ２～５**参照

※科目の具体的な名称については、第９回WGでの意見を踏まえ、今後の整理の中で引き続き検討することとしてはどうか。

→**補足イメージ６**参照

- 必履修科目、選択科目共に、〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域の資質・能力を「話や文章の機能（仮称）」によって焦点化して整理する。これにより、小・中学校における学びが基盤となって高等学校への学びに接続していることを明確にするとともに、育成する資質・能力と教材とする文章の種類との関係を明確にし、各科目の趣旨に沿った学びを充実する。

②教材の扱いについて

- 教材の選定に当たっては、当該科目の趣旨（どのような資質・能力を主に育成しようとしているのか）を踏まえ、基本的な教材を定めるとともに、それ以外の教材については趣旨に合致するかどうかで判断することが重要であるという整理をしてはどうか（例えば、論理的思考力の育成に重きを置く科目で扱う教材では、論説文や批評文などを中心としつつ、科目の趣旨に合致する活用の仕方であれば文学作品等を扱うことも可能（例：文学作品に関する批評文等）。多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力の育成に重きを置く科目も同様に、主に文学作品や古典を中心としつつ、それらに関する論説文や批評文等を扱うことも可能。）

→**補足イメージ７**参照

- 実用文については、メディアリテラシーの観点も踏まえ、「話や文章の機能(仮称)」に即して指導に適切な文章と判断されるもの（報道文や広告、それらに関する論説文や批評文など）を中心に扱うことを明記する方向で検討してはどうか。

※新科目名は全て仮称

高等学校国語科における具体的な科目案

補足イメージ１

※科目名は全て仮称

（１）必履修科目

現代の国語Ⅰ（２単位）

実社会に必要な国語の知識・技能を身に付けて適切に使えるようにするとともに論理的に考える力や他者との関わりの中で伝え合う力を育成する。
※現行の必履修科目「現代の国語」の枠組みを維持。

言語文化Ⅰ（２単位）

古典や近現代の文章を通して我が国の言語文化に対する幅広い知識や教養を身に付け、多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を育成する。
※現行の必履修科目「言語文化」の枠組みを維持。

（２）選択科目

現代の国語Ⅱ（４単位） 標準

- 現行の「論理国語」「国語表現」の標準的な内容を組み合わせ、「現代の国語」の内容を深化させて学ぶ科目。
- 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域の資質・能力を「事実や知識の整理と理解」「考えや主張の理由付けと吟味」の「話や文章の機能（仮称）」に応じて働かせ、論理的に思考することや他者との対話を通して、主として、実社会で必要とされる国語による諸活動に必要な力を育成する。

言語文化Ⅱ（４単位） 標準

- 現行の「文学国語」「古典探究」の標準的な内容を組み合わせ、「言語文化」の内容を深化させて学ぶ科目。
- 「書くこと」「読むこと」の2領域の資質・能力を「思いや経験の表出と想像」「伝統的な言語文化の継承と創造」の「話や文章の機能（仮称）」に応じて働かせ、作品を多様な考えや価値観を踏まえて解釈したり、時代を超えた連続性の中で我が国の言語文化への理解を深めたりすることを通して、主として、多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を育成する。

論説と批評（２単位） 発展

- 現行の「論理国語」の発展的な内容を再整理し、「現代の国語Ⅱ」の「書くこと」「読むこと」を発展させた内容を学ぶ科目。
- 実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、批判的に読んだり自らの考えを論述したりすることを通して、主として、論理的に思考し表現する力を育成する。

文学と叙述（２単位） 発展

- 現行の「文学国語」の発展的な内容を再整理し、「言語文化Ⅱ」の「書くこと」「読むこと」を発展させた内容を学ぶ科目。
- 文学作品などを読んでその解釈の多様性について考察したり批評したりすること、独創的な表現を工夫して想像したことや思いを伝えたりすることを通して、様々な事柄を多面的に捉え、主として、多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を育成する。

対話と表現（２単位） 発展

- 現行の「国語表現」の発展的な内容を再整理し、「現代の国語Ⅱ」の「話すこと・聞くこと」「書くこと」を発展させた内容を学ぶ科目。
- 多様な他者との関わりの中で文章・口頭の双方において論理的・説得的に対話や表現をしたり、様々な媒体を通して他者との対話を重ね新たな価値を創出したりすることを通して、主として、多様な他者との多角的なコミュニケーションを図る力を高める。

古典と文化（２単位） 発展

- 現行の「古典探究」の発展的な内容を再整理し、「言語文化Ⅱ」の「読むこと」を発展させた内容を学ぶ科目。
- 古典を主体的に読み進めたり、我が国の伝統と文化の基盤として古典を学び、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の価値や意義について考えたりすることを通して、主として、多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像する力を育成する。

※「話や文章の機能（仮称）」については、第7回WGで提示した案の文言を使用しており、詳細については引き続き検討。

選択科目の単位数と各科目の履修順序について

補足イメージ２

具体的論点

（１）選択科目の標準単位数について

- 選択科目の標準科目は、多くの生徒が履修することが想定される基準的な科目として、選択科目における標準的な資質・能力を確実に育成する役割を担うものであり、以下のような点を担保する必要。

- 「現代の国語Ⅱ」においては、人間同士のリアルなコミュニケーションの重要性が高まる中で、自分の考えを言葉にして論理的かつ説得的に表現・対話する力を育成するために、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域をバランスよく学習し、身に付けた資質・能力を相互に関連付けながら、複数の単元において繰り返し活用することが求められる。特に、異なる領域の学習を往還しながら、社会的な文脈の中で言葉を適切に活用する力を身に付けるためには、一定の学習時間を確保し、段階的かつ継続的に学習を積み重ねる必要がある。

- 「言語文化Ⅱ」においては、自らの思いや経験を的確に表現することの重要性が高まる中で、多様な他者の感性や情緒を理解するとともに、それらを通じて自らの思いや経験を効果的に表現する力を育むため、様々な文章を読み深く共感したり豊かに想像したりすること、それらを自分の言葉で表現すること、言語文化を継承・発展させていく学習を充実させることが求められる。こうした学習では、古典と現代の文章を関連付けながら解釈を深めたり、読むことと書くことを往還させながらよりよい表現を工夫したりするなど、多様な学習活動を繰り返し行うことが重要であり、充実した学習内容を展開するためには、一定の時間が必要となる。

- このため、標準科目においては、充実した学習内容で構成し、十分な学習時間を確保する必要があることから、今次改訂において柔軟な教育課程編成を可能にする仕組み（※）を導入することも踏まえつつ、標準単位数としては４単位にしてはどうか。

- 選択科目の発展科目は、標準科目の履修を前提に、より発展的に内容を焦点化して学ぶ科目であるため、生徒の興味・関心に応じた選択を可能にするため標準単位数を２単位にしてはどうか。

※ なお、前回の委員意見を踏まえ、今般の教育課程の柔軟化の仕組み（単位の倍化、増単・減単を　きめ細かく可能とする等）の下で、生徒の実態に応じて標準科目の単位数を柔軟に設定することで、複数の発展科目の履修が可能になることについても、併せて明確に示すことが考えられる。
（補足イメージ３、４、５参照）

（２）各科目の履修順序について

- 左記の単位の扱いに加え、必履修科目と選択科目の標準科目の履修順序について、必履修科目を１・２年次で分割履修するような場合、２年次目においては、必履修科目と選択科目の標準科目を同時に履修できることとしてはどうか。
（現行の履修順序の考え方と同様　※下記【参考】参照）

（例：「現代の国語Ⅰ」を４単位に増単して１・２年次に分割履修する場合、2年次においては、必履修科目の「現代の国語Ⅰ」と選択科目の標準科目である「現代の国語Ⅱ」を同時に履修することができる。）

1年		2年	
現代の国語Ⅰ	2	現代の国語Ⅰ	増単２
言語文化Ⅰ	2	現代の国語Ⅱ	4

- 選択科目の標準科目と発展科目についても、必履修科目と同様に整理することとしてはどうか。

（例：「言語文化Ⅱ」を2・３年次で分割履修する場合、3年次においては、選択科目の標準科目である「言語文化Ⅱ」と、発展科目である「文学と叙述」を同時に履修することができる）

2年		3年	
現代の国語Ⅱ	4	言語文化Ⅱ	2
言語文化Ⅱ	2	文学と叙述	2

【参考】

選択科目については，原則として，「現代の国語」及び「言語文化」を履修した後に履修させるとしているだけで，選択科目相互の履修順序は示していない。ここで原則としてとしているのは，例えば，「現代の国語」，「言語文化」を２以上の連続する年次にわたって分割履修するような場合に，２年次目においては，選択科目を同時に履修することができることを可能とするものである。

なお，ここで定めている各科目の履修の順序は，この教科の系統性に基づき，後に履修する科目の内容が前に履修する科目の内容を前提として定められていることによるものであり，生徒にはこの順序に則って履修させることが求められる。

（高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 第3章より）

※科目名は全て仮称

高等学校国語科　科目の履修イメージ①

補足イメージ３

現行科目の履修状況を踏まえ、２・３年における国語の履修単位数を計８単位程度と想定した場合

基本パターン例①

1年		2年		3年	
現代の国語Ⅰ	2	現代の国語Ⅱ	2	現代の国語Ⅱ	2
言語文化Ⅰ	2	言語文化Ⅱ	2	言語文化Ⅱ	2

標準科目を２，3年で分割履修する。3領域をバランスよく学び、多様な文章に触れることができる。多くの学校で実施されると想定する基本的な履修パターン。

バリエーション　例①

1年		2年		3年	
現代の国語Ⅰ	2	現代の国語Ⅱ	減単 2	言語文化Ⅱ	2
言語文化Ⅰ	2	言語文化Ⅱ	2	論説と批評	2

生徒の状況に応じて発展的な学習が可能な場合は、標準科目の単位を減単し、発展科目を履修することも可能。

バリエーション　例②

1年		2年		3年	
現代の国語Ⅰ	2	現代の国語Ⅱ	減単 2	論説と批評	2
言語文化Ⅰ	2	言語文化Ⅱ	減単 2	古典と文化	2

生徒の状況に応じて更に発展的な学習が可能な場合は、標準科目の2科目を減単することで、発展科目が2科目履修できる。

高等学校国語科　科目の履修イメージ②

補足イメージ４

現行科目の履修状況を踏まえ、２・３年における国語の履修単位数を計12単位程度と想定した場合

基本パターン　例②

1年		2年		3年	
現代の国語Ⅰ	2	現代の国語Ⅱ	4	言語文化Ⅱ	2
		言語文化Ⅱ	2	論説と批評	2
				対話と表現	2
言語文化Ⅰ	2	現代の国語Ⅱ	2	現代の国語Ⅱ	2
		言語文化Ⅱ	4	文学と叙述	2
				古典と文化	2

標準科目を２，3年で分割履修すると、標準科目＋2科目の発展科目の履修が可能となる。多くの学校で実施されると想定する基本的な履修パターン。

バリエーション　例③

1年		2年		3年	
現代の国語Ⅰ	2	現代の国語Ⅱ	減単 2	論説と批評	2
言語文化Ⅰ	2	言語文化Ⅱ	4	文学と叙述	2
				古典と文化	2

生徒の状況に応じて発展的な学習が可能な場合は、標準科目を減単することで、複数の発展科目の履修が可能になる。

バリエーション　例④

1年		2年		3年	
現代の国語Ⅰ	2	現代の国語Ⅱ	4	現代の国語Ⅱ	増単 2
言語文化Ⅰ	2	言語文化Ⅱ	2	言語文化Ⅱ	2
				対話と表現	2

標準科目を増単することで、生徒の状況に応じて、標準的な学習を時間をかけて丁寧に行うことが可能になる。

補足イメージ５

令和８年２月１９日
総則・評価特別部会(第６回)
【資料２】P２５

高等学校の教育課程の柔軟化の仕組みの方向性（イメージ）

（週当たり授業コマ数）

1 2 3 … … 28 29 30 コマ

必履修
１単位（35単位時間の学習）
科目A 科目B 減単 科目C
科目E 科目F 科目G

選択

学校設定

① 柔軟な組み替えを可能に

- 「各科目内容の一部または全部について他科目への移行・統合」し、科目の柔軟な組み替えを可能に

（具体例）
・理科の基礎系科目を統合
・国語科と探究を組み合わせ
・数学Ⅰと学び直しの学校設定科目を組み合わせ　等

組み替えの要件のポイント

①元の教科・科目の目標の趣旨を損なわない

②教育課程全体として、組み替え前と同様の成果が期待される

③ カリキュラム・ポリシーとの関連で、変更の趣旨・内容を公表し、生徒・保護者等に説明する

科目の内容の取扱い

- 従前同様、生徒の実態を踏まえ特に必要な場合は「基礎的・基本的な」事項に重点を置くなど内容を選択して扱うことが可能
- その上で、「発展的・探究的な」事項に重点を置いた選択的な取り扱いも可能とする

② １単位の計算

50分×17コマで１単位を標準
（新しい算定による単位を便宜的に「新単位」という）

必履修
１新単位（17単位時間の学習）
科目A 減単 科目B 減単 減単
科目E 科目F 科目G

組替え後科目

選択

組替え後科目

学校設定

免除・振替

週当たり授業時数の標準は示さない　コマ

③ 減単の考え方

- 「一定の限度の下で減単可」という考え方が基本
- 現在減単できない標準が２単位の必履修科目についても、１新単位の範囲内で減単を認める
- 各必履修「教科」に係る科目の履修単位数の合計が３新単位以下となる減単は不可
（公共、芸術（音楽Ⅰor美術Ⅰor工芸Ⅰor書道Ⅰ）、情報Ⅰ、家庭基礎）

④ 科目の履修免除の要件のポイント

①社会的信頼性が確立した外部試験により、免除科目の知識・技能の習得が概ね判断可能

②振替科目等の履修により、免除科目の資質・能力を発展的に育成可能で、総合的な代替性がある

③ 生徒の実態・希望を踏まえ、資質・能力の育成に大きく上回る成果が期待できる

履修免除の対象科目

- 外国語・数学を対象に制度運用を開始していくことを念頭に検討
- 具体的な外部試験の種類や、履修免除に必要な級の水準等については、外国語WG及び算数・数学WGにおいて議論

⑤ 学校設定教科・科目の単位数の上限

卒業単位に含められる学校設定科目の単位数上限について
普通科 ⇒ 28単位
その他普通教育を主とする学科⇒36単位に増加させることの適否を検討

週当たり授業時数

標準を示さない
（現在週当たり30コマが標準）

⑥ 必要な改善・質確保のための仕組み

これらの仕組みの不適切な運用を防ぎ、国・都道府県等・各学校が必要に応じて改善を図り、質を確保できるようそれぞれの役割を整理
（補足イメージ②参照）

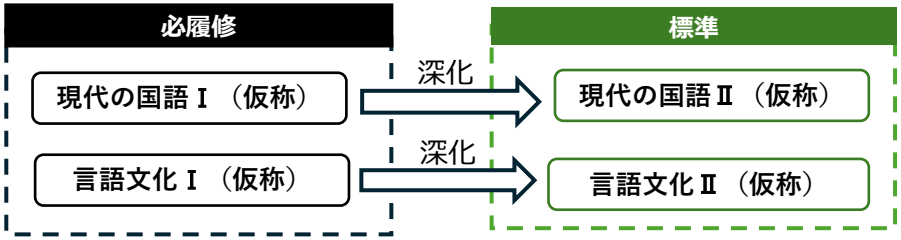
選択科目の名称の考え方について

補足イメージ６

必履修科目・選択科目（標準）

- 必履修科目については、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成に主眼を置く科目を「現代の国語Ⅰ」、上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることに主眼を置く科目を「言語文化Ⅰ」としている。必履修科目は、現行の枠組みを維持しつつ学習内容を明確にすることで学びの充実を図るものであり、名称変更を伴う内容の変更ではないため、現行の名称を継承し、選択科目との系統性を示すため「Ⅰ」を付すことにしている。

- 選択科目の標準科目については、必履修の２科目をそれぞれ深化させて学ぶ科目であるため、その系統性を明確に示す観点から、必履修科目の名称に「Ⅱ」を付した名称としている。



選択科目（発展）

- 選択科目の発展科目については、標準科目の学びを焦点化して各科目を構成していることから、その学習内容が分かりやすく伝わる名称を新たに設定。

① ２つの領域で構成する科目は、「〇〇と〇〇」としてそれぞれの領域の学びを象徴的に表した言葉を並列で示している。

②1つの領域で構成する科目は、「〇〇と〇〇」の前半でその領域での学びを、後半ではその学びの視点を示している。

「論説と批評（仮称）」（「書くこと」「読むこと」の2領域）

・「論説」は「読むこと」の領域において主として論説等を読み論理的に考える学習を、「批評」は「書くこと」の領域において対象について根拠を基に自分の考えを形成し論じたり評価したりする学習を行うことを表している。

「対話と表現（仮称）」（「話すこと・聞くこと」「書くこと」の２領域）

・「対話」は「話すこと・聞くこと」の領域において、他者との対話を通して考えを形成し深める学習を、「表現」は「書くこと」の領域において、自分の考えや思いを工夫した表現で伝える学習を行うことを表している。

「文学と叙述（仮称）」（「書くこと」「読むこと」の2領域）

・「文学」は「読むこと」の領域において主として文学作品を読み評価したり解釈の多様性について考察したりする学習、「書くこと」の領域で詩歌や物語を創作する等の学習を行うことを表している。

「古典と文化（仮称）」（「読むこと」の１領域）

・「古典」は「読むこと」の領域において古典作品を主体的に読む学習を行うことを表し、「文化」は我が国の伝統や文化との関わりの中で古典を捉えその価値や意義について考えることを強調して表している。

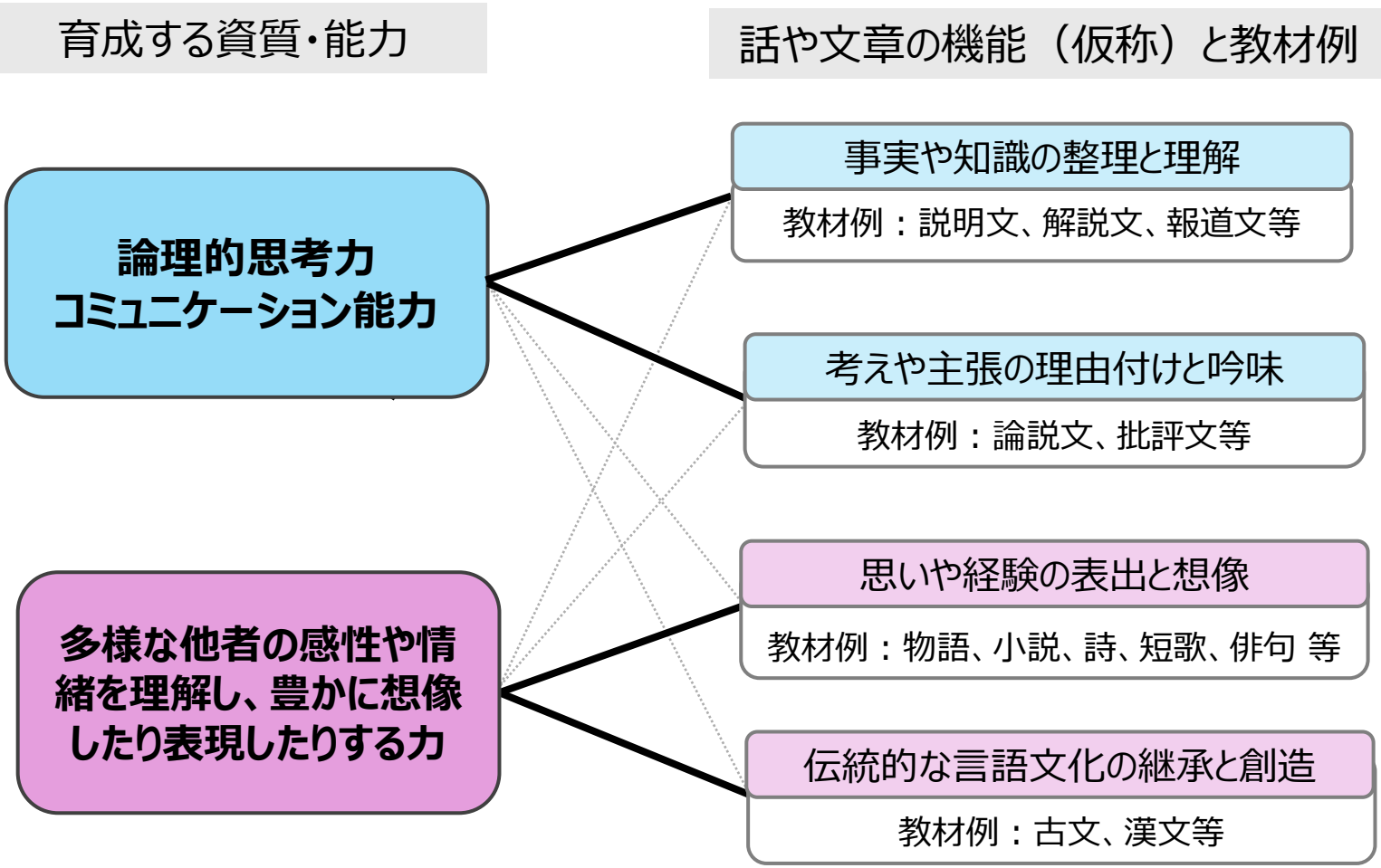
※各科目において扱う領域が異なるため、名称において「学習対象と活動」等、統一したものを表現しているのではなく、<u>各科目の学びが分かる言葉を象徴的に示している</u>。

【第9回WGでの主なご意見】

- 「現代の国語（仮称）」の名称に違和感。「言語生活」にしてはどうか。<u>別案：「言語生活」</u>
- 「論説と批評（仮称）」は「論理」という言葉を残した方がよいのではないか。<u>別案：「論理と批評」</u>
- 「文学と叙述（仮称）」の「叙述」は文学的な文章に限った言葉ではない。小学校の学習指導要領で同じ言葉が使われているので、混乱するのではないか。<u>別案：「文学と創作」、「文学と創造」、「文学と鑑賞」等</u>
- 「古典と文化（仮称）」の「文化」は他と位相が異なる。「文化」と「言語文化」は異なる概念となる。現行の「古典探究」は文化としての古典の継承者を育てる科目。<u>別案：「古典と玩味」、「古典と鑑賞」、「古典と享受」等</u>

育成する資質・能力と教材の関係

補足イメージ７



※太線は資質・能力を育成する際に重視する機能及び主たる教材として想定されるもの。点線は資質・能力の育成に資する観点から授業において適切に扱われる場合に教材として用いられる可能性があるもの。
※実際の話や文章は、それぞれが上記の機能（「話や文章の機能（仮称）」）を複合的に果たしている場合も考えられるが、ここでの「話や文章の機能（仮称）」は、児童生徒が学習で扱う話や文章について、その主な機能を示すものである。
※実際の指導においては、文章だけに限らず「説明や解説をする話」「主張や提案を述べる話」「議論や討論などの話合い」も扱う。

科目構成の見直しイメージ（全体像）

参考資料

令和８年５月11日
第９回国語ＷＧ
【資料１】Ｐ２９
（一部修正）

【現行】

主に論理的思考力やコミュニケーション能力の育成（主に論説文・説明文中心）

- **現代の国語(2単位)** 必履修
  - 読むこと
  - 書くこと
  - 話すこと・聞くこと
- **論理国語(4単位)** 履修77%
  - 読むこと
  - 書くこと
- **国語表現(4単位)** 履修16%
  - 話すこと・聞くこと
  - 書くこと

主に多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力の育成（主に文学・古典中心）

- **言語文化(2単位)** 必履修
  - 読むこと
  - 書くこと
- **文学国語(4単位)** 履修49%
  - 読むこと
  - 書くこと
- **古典探究(4単位)** 履修87%
  - 読むこと

【見直し案】

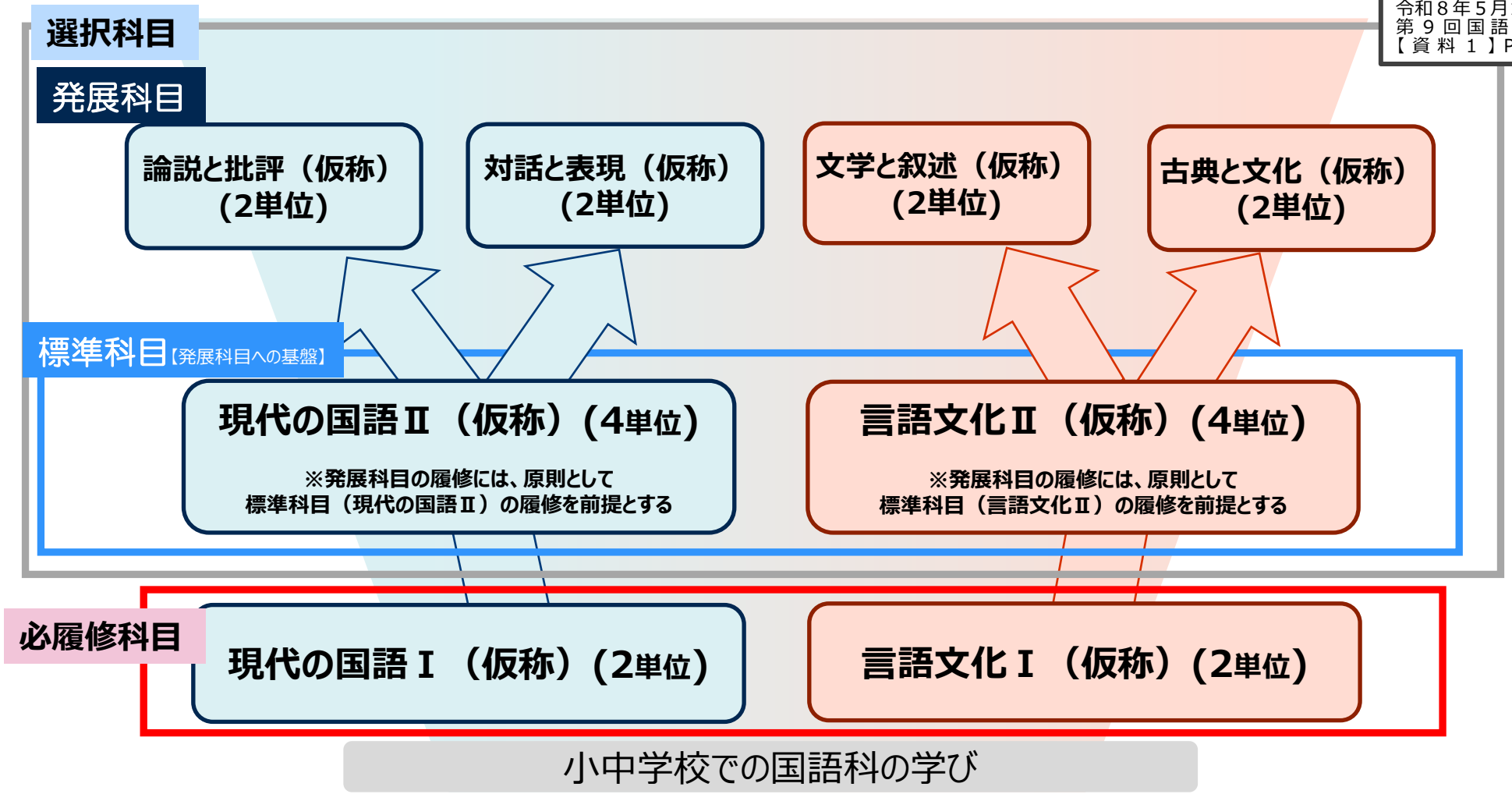
- **現代の国語Ⅰ（仮称）(2単位)** 必履修
  - （現代の国語）読むこと
  - （現代の国語）書くこと
  - （現代の国語）話すこと・聞くこと
- **現代の国語Ⅱ（仮称）(4単位)** 選択・標準
  - （論理国語(標準)）読むこと
  - （論理国語(標準)）書くこと
  - （国語表現(標準)）話すこと・聞くこと
- **論説と批評（仮称）(2単位)** 選択・発展
  - （論理国語(発展)）読むこと
  - （論理国語(発展)）書くこと
- **対話と表現（仮称）(2単位)** 選択・発展
  - （国語表現(発展)）話すこと・聞くこと
  - （国語表現(発展)）書くこと
- **言語文化Ⅰ（仮称）(2単位)** 必履修
  - （言語文化）読むこと
  - （言語文化）書くこと
- **言語文化Ⅱ（仮称）(4単位)** 選択・標準
  - （文学国語(標準)）読むこと
  - （文学国語(標準)）書くこと
  - （古典探究(標準)）読むこと
- **文学と叙述（仮称）(2単位)** 選択・発展
  - （文学国語(発展)）読むこと
  - （文学国語(発展)）書くこと
- **古典と文化（仮称）(2単位)** 選択・発展
  - （古典探究(発展)）読むこと

※ 現行の「%」は教科書の需要数を基に推計した履修率

科目構成の見直し後の履修イメージ（必履修科目と選択科目の系統性）

参考資料

令和８年５月11日
第９回国語ＷＧ
【資料１】Ｐ３０



※履修に関する基本的考え方について、以下のように考えることとしてはどうか。

- 選択科目は原則として必履修科目の2科目を履修した後に履修させる。ただし、必履修科目を２年以上の連続する年次にわたって分割履修する場合は、2年次目において、選択科目を同時に履修することも可能とする。
- 選択科目の発展科目は、標準科目において育成される資質・能力を基盤として特定の領域をより発展的に扱うものであり、原則として発展科目は同系統の標準科目を履修した後に履修させることとする。（例：「対話と表現」または「論説と批評」の履修は、「現代の国語Ⅱ」の履修が前提となる。）

※教育課程の柔軟化に関する基本的考え方について、以下のように考えることとしてはどうか。

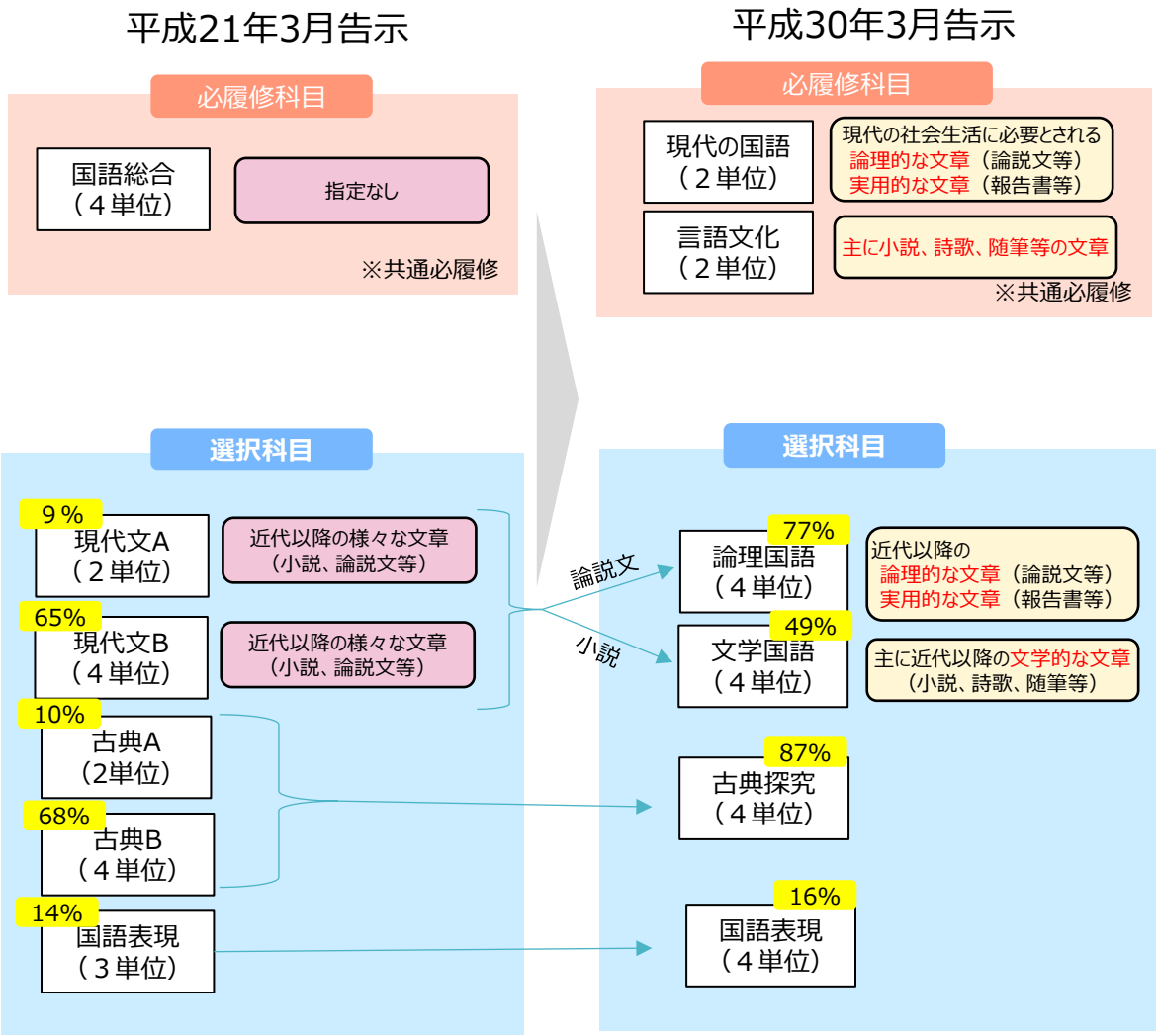
- 必履修科目、選択科目について、また、選択科目の標準科目及び発展科目については、生徒の実態に応じて柔軟に組み換えることができる。その場合においても、組み換え後の科目の内容については、当該科目において育成することとされている資質・能力及び内容の系統性が確保され、学習が段階的に深化するよう編成すること。

高等学校国語科の科目変遷・現行改訂時の考え方

参考資料

令和８年５月11日
第９回国語ＷＧ
【資料１】Ｐ２３

近年の科目変遷の流れ



※「％」は、教科書の需要数を基に、文部科学省にて推計した履修率。（必履修科目の需要数を履修率100%として算出。平成30年告示版は、必履修2科目の需要数に差があるため、平均値として算出。）
平成21年告示版は令和３年度、平成30年告示版は令和７年度の値を参照。

現行改訂時の考え方

以下の課題を踏まえ、H30改訂で科目構成を大幅に見直し

【指摘されていた課題】

- **教材の読み取りが指導の中心**になることが多く、主体的な表現等を重視した授業が十分に行われていない
- **話し合いや論述など**の「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の**学習が十分に行われていない**
- 古典の学習意欲が高まらない（日本人が大切にしてきた言語文化を積極的に享受し、社会や自分との関わりに生かしていく観点が弱い）

＜各科目の趣旨＞

- **現代の国語（必履修）**
  実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を育成する科目
- **言語文化（必履修）**
  上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目
- **論理国語（選択履修）**
  実社会において必要となる、論理的に書いたり批判的に読んだりする力の育成を重視した科目
- **文学国語（選択履修）**
  深く共感したり豊かに想像したりして、書いたり読んだりする力の育成を重視した科目
- **国語表現（選択履修）**
  実社会において必要となる、他者との多様な関わりの中で伝え合う力の育成を重視した科目
- **古典探究（選択履修）**
  古典を主体的に読み深めることを通して、伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する資質・能力を重視した科目

高等学校国語科の現状と課題、見直しの方向性

参考資料

令和８年５月11日
第９回国語ＷＧ
【資料１】Ｐ２４

１．現状と課題

（１）履修の実態

- 前回改訂のねらいに基づく改善はある程度進捗
  - ✓ 「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導への教師の意識の変化
  - ✓ 教材に依存した指導、文学的文章の内容理解偏重の指導、古典文法に偏った指導の改善
- 一方、選択科目の単位数が多く（全て４単位）、時間割編成上の制約が大きい中、以下の実態も見受けられる。

① 実社会におけるコミュニケーション能力の育成を図る「国語表現」が、大学入試に繋がらない等の理由で、進学希望者が多い高校で選択されにくい

② 国公立理系では「論理国語」と「古典探究」のみの履修、私立理系では「論理国語」のみの履修にとどまる例が多く、バランスが悪い

科目	履修率
現代の国語	100%
言語文化	100%
論理国語	77%
文学国語	49%
国語表現	16%
古典探究	87%

教科書の需要数を元に、文部科学省で推計。（必履修科目の「現代の国語」「言語文化」の需要数を履修率100%（差があるため平均をとる）として、他科目の履修率を推計）
R7年度の値を参照

（２）顕在化している課題

- 前回改訂で問題となった課題の改善は継続する必要
  （引き続き重視すべき改善の視点）
  - ✓ 「読むこと」と「話すこと・聞くこと」、「書くこと」のバランス、多様な教材のバランス
  - ✓ 言語文化を積極的に享受し、生かしていく視点
- 前回改訂以降、急速に発展・普及した生成AIがもたらす変化を念頭に置くと以下のような点が課題。

① 人間同士のリアルなコミュニケーションの重要性が高まる中、自らの考えを言葉にし、論理的かつ説得的に表現・対話する力の育成が不十分

② 人間ならではの感性をはぐくみ、それらを的確に表現することの重要性が高まる中．理系希望者を中心に、文学を題材とした学びが相対的に不足（文理融合の視点）

- 小中高共通の課題として、以下の点についても踏まえる必要

① 読書離れが進む中、読書を通して出合った語句や表現、ものの見方や考え方を、自分の中に蓄え次の学びにつなげていく力の育成

② 短文でのやりとりが中心となるSNSなどに日常的に接する一方でまとまった文章を読む機会が不足している中で、文章を的確に理解するとともに、自分の考えを深めたり、表現を工夫したりする力の育成

③ 日々の情報収集もSNSが中心となり、報道を含む多面的・多角的な情報収集が行われなくなっていることを踏まえたメディアリテラシーの強化

④ 小・中学校の学びが基盤となって高校の学びへとつながっていくことを明確にすることによる、中学校と高校の学びの段差の解消

（参考）第８回WGでの委員からの主なご意見等

- 選択科目が４単位と多く、履修できる科目に限界があることによって、「話すこと・聞くこと」の領域を学ばなかったり、文学作品を読まないといった学びの偏りが生じている状況を是正する必要がある。
- 履修率からも分かる通り、「国語表現」など表現系の科目が軽視されてしまっている状況を是正すべき。
- 自分の考えを言葉にして伝える力を重視すべき。
- 現行の科目は、各科目の趣旨が目標で明確に示されておらず、科目の特性が掴みにくい。科目の特性を目標でも示すべき。
- 古典を学ぶ意義が十分に理解されていない。また、「古典探究」は、教科書の内容も含め探究と言えるものになっていない実態がある。
- 「論理」とはどういったものを想定しているのか、明確にする必要がある。
- 読書離れが進んでいることも踏まえ、より多様な文章を読む機会を確保する方策について、国語科としてどう考えるか。
- 現行の必履修科目「現代の国語」と「言語文化」の内容は、１年次で完結させるのではなく、2年次以降でも継続的に学んでいく必要がある。

議題
(2)

高等学校国語科の目標、高次の資質・能力について

論点１　各科目の「目標」の在り方

論点２　各科目の「高次の資質・能力」の在り方

検討すべき論点

【第2回総則・評価特別部会で示された構造化・表形式化イメージを基に作成】

目標

●●する資質・能力（資質・能力の趣旨）について、●●することなどを通して（学習過程）、次のとおり育成することを目指す。		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等

（見方・考え方）

●●（当該教科で扱う事象や対象）を●●（当該教科固有の物事を捉える視点）の視点から捉え（に着目して捉え）、●●（当該教科固有の考え方や判断の仕方）すること。

内容

（並行パターン）

思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 xxxxxxxxxxxx	1)	・xxxxxxx	・xxxxxxx
	2)	・xxxxxxx	・xxxxxxx
	3)	・xxxxxxx	・xxxxxxx
知識及び技能に関する統合的な理解 xxxxxxxxxxxx	・xxxxxxx ・xxxxxxx		

【本日の論点】

論点１　各科目の「目標」の在り方

○目標の柱書

・これまでのWGで小中高共通で設定することを検討してきた国語科の目標の柱書を踏まえ、高等学校国語科の各科目における目標をどのように記載すべきか

○資質・能力の柱ごとの目標

・高等学校国語科の各科目の「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」について、目標にどのように記載すべきか

論点２　各科目の「高次の資質・能力」の在り方

○高次の資質・能力

・「高次の資質・能力」について、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の深まりの可視化を通じて「深い学び」を実現する単元づくりのイメージを教師が持てるようにする役割を担うこととされている中、高等学校国語科の各科目における「高次の資質・能力」をどのように考えるか

【論点１】（参考）国語科における目標の示し方

※第5回WGでの案をもとに表を作成

目標

小中高共通（柱書）

国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，話すこと・聞くこと，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
【小学校】	日常生活に必要な国語の特質を理解し適切に使うとともに，我が国の言語文化に触れながら親しむことができるようにする。	国語で筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い，日常生活における他者との関わりの中で，互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高める。	①考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し，伝え合う過程に気を付けながら，学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を育み，我が国の言語文化に触れ，国語を尊重する態度を養う。
【中学校】	社会生活に必要な国語の特質を理解し適切に使うとともに，我が国の言語文化に親しみながら理解できるようにする。	国語で論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を養い，社会生活における他者との関わりの中で，互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高める。	①考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し，伝え合う過程を確かめながら，学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を豊かにし，我が国の言語文化に関わり，国語を尊重する態度を養う。
【高等学校】	生涯にわたる社会生活に必要な国語の特質を深く理解し適切に使うとともに，我が国の言語文化を深く理解できるようにする。	国語で論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で，互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高める。	①考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し，伝え合う過程を吟味しながら，学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，国語を尊重する態度を養う。

見方・考え方

小中高共通

自分や他者の言葉を、意味や働き、使い方や表現の意図に着目して多面的・多角的に吟味し、多様な立場や考えを理解して、丁寧に言葉を選び、よりよく伝え合うこと

【目標に関するこれまでのWGでの検討状況】

- 柱書は、
  国語科で育成したい資質・能力の趣旨を学校種共通で端的に示し、資質・能力の柱ごとの目標（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）は、発達段階に応じて学校種ごとに系統的に示す。
- 「知識及び技能」は、
  ・学習の対象となる国語について、学校種に応じて扱う生活の位相を整理（「日常生活」「社会生活」「生涯にわたる社会生活」）する。
  ・「国語の特質を理解」することについて、高等学校では、中学校段階の学習を踏まえ、理解の深化に重点を置くことを明確に示す。
  ・言語文化について、理解の深まりを発達段階に応じて系統的に示す。
- 「思考力、判断力、表現力等」は、
  ・思考力や想像力に関する力を学校種ごとの発達段階に応じて系統的に示す。
  ・他者との関わりの場面や範囲について学校種に応じて整理（「日常生活」「社会生活」「生涯にわたる社会生活」）して示す。
- 「学びに向かう力、人間性等」は、
  ・①「当該教科等の学習で育みたい学びや生活に向かう態度」については、小学校では、表現や伝え合いの過程に注意を向けること、中学校では、その過程を確かめながら捉え直すこと、高等学校では、過程を吟味することに重点を置いて、学校種に応じて系統的に示す。
  ・②「当該教科等の学習で育みたい情意・感性」については、言語感覚の高まりや、言語文化への関わり方について、学校種に応じて系統的に示す。

【論点１】　各科目の目標について

目標の考え方（具体的な論点）

（１）目標の柱書について

● 目標の柱書は、国語科で育成したい資質・能力の趣旨を端的に示すものであることから、これまでのＷＧでは以下のとおり小中高共通で示す整理をしてきた。この整理の下、高等学校国語科の各科目においてはどのように示すべきかが新たな論点となる。

> 目標の柱書：
> 国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，話すこと・聞くこと，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。

● 国語科で育成する資質・能力のうちどの資質・能力の育成に重きを置いているかによって科目を分けているという科目設置の趣旨を踏まえ、高等学校の各科目においては、科目ごとに扱う領域によって書き分けて示すこととしてはどうか。

※なお、目標の柱書で示している「話すこと・聞くこと，書くこと，読むことを通して」の部分は、活動ではなく領域を示すという整理がされている。（第５回ＷＧ）

（２）「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」について

①必履修、選択（標準）、選択（発展）科目の三段階で深まりを示す

● 高等学校国語科においては、以下の趣旨の基に科目を設定している。

・必履修科目：
義務教育段階で身に付けた力を基盤として、全ての生徒が共通して学ぶ基礎的な資質・能力を育成

・選択（標準）科目：
必履修科目で育成した資質・能力を基盤として、多くの生徒が卒業までに身に付けることが望ましい標準的な資質・能力を総合的・発展的に育成

・選択（発展）科目：
必履修科目や選択（標準）科目で培った資質・能力を基に、生徒の興味・関心や進路等に応じて、特定の領域や内容に焦点化し、高度かつ専門的な資質・能力を育成

● 科目によって育成する資質・能力の深まりの程度はあるが、国語科として育成を目指す資質・能力の方向性は全科目共通であることを踏まえ、教科目標の文言を基本としつつ、必履修科目、選択（標準）科目、選択（発展）科目の三段階で目標を段階的に設定し、育成する資質・能力の深まりを示してはどうか。

②育成する資質・能力の系統別に示す

● 科目は、育成する資質・能力によって以下の二系統で設定しており、系統によって育成する「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」は異なることから、これらの系統を踏まえて目標も書き分けることとしてはどうか。

・Ａ：主として論理的思考力やコミュニケーション能力を育成する科目の系統
（「現代の国語Ⅰ・Ⅱ」「論説と批評」「対話と表現」）

・Ｂ：主として多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を育成する科目の系統
（「言語文化Ⅰ・Ⅱ」「文学と叙述」「古典と文化」）

③選択（発展）科目は科目の特質を分かりやすく示す

● 選択（発展）科目については、特定の領域や内容に焦点化し、高度かつ専門的な資質・能力の育成を図る科目であることを踏まえ、選択（発展）の各科目において焦点化・高度化させている内容を、目標においても示すこととしてはどうか。

（３）「学びに向かう力、人間性等」について

●「学びに向かう力、人間性等」は、

①当該科目の学習で育みたい学びや生活に向かう態度

②当該科目の学習で育みたい情意・感性

を示すものであり、国語科全体を通して一貫して育成を目指す資質・能力であることから、教科目標の文言を基本としつつ、各科目が扱う領域に応じて、主となる学習活動を踏まえて書き分けることとしてはどうか。

高等学校 各科目の目標（改訂案） 一覧

※具体の文言は今後告示文を検討する中で引き続き精査

国語科の目標（※小中高共通）		
柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，話すこと・聞くこと，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
生涯にわたる社会生活に必要な国語の特質を深く理解し適切に使うとともに，我が国の言語文化を理解できるようにする。	国語で論理的に考える力，深く共感したり豊かに想像したりする力，生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高める。	①考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し，伝え合う過程を吟味しながら，学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，国語を尊重する態度を養う。

現代の国語Ⅰ	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，話すこと・聞くこと，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。		
	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付け、適切に使えるようにする。	国語で論理的に考える力や，生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高める。	①様々な話や文章に触れて考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し，理解や考え、表現の工夫を伝え合う過程を吟味しながら，学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，国語を尊重する態度を養う。
現代の国語Ⅱ	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，話すこと・聞くこと，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。		
	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付け，効果的に使えるようにする。	国語で論理的に考える力や，生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高め，発揮する。	同上
論説と批評	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。		
	学術的な学びの基礎に係る事柄に関する国語の知識や技能を身に付け，効果的に使えるようにする。	国語で論理的に考える力を高め，他者や自己の思考の妥当性を吟味する力を養う。	①様々な文章に触れて考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し，理解や考え、表現の工夫を伝え合う過程を吟味しながら，学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，国語を尊重する態度を養う。
対話と表現	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，話すこと・聞くことを通して，次のとおり育成することを目指す。		
	多様な他者との多角的な関わりに必要な国語の知識や技能を身に付け，効果的に使えるようにする。	生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を発揮し，様々な媒体を通して言葉で他者と協働する力を養う。	①様々な話や文章に触れて考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し，自分の考えや表現の工夫を伝え合う過程を吟味しながら，学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，国語を尊重する態度を養う。
言語文化Ⅰ	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。		
	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付け適切に使うとともに，我が国の言語文化を広く理解できるようにする。	国語で深く共感したり豊かに想像したりする力を高め，先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で古典の意義や価値について考える力を養う。	①様々な文章に触れて考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し，理解や解釈、考え、表現の工夫を伝え合う過程を吟味しながら，学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，国語を尊重する態度を養う。
言語文化Ⅱ	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。		
	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付け効果的に使うとともに，我が国の言語文化を深く理解できるようにする。	国語で深く共感したり豊かに想像したりする力や，先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で古典の意義や価値について考える力を高める。	同上
文学と叙述	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。		
	創作に係る事柄に関する国語の知識や技能を身に付け，効果的に使えるようにする。	国語で深く共感したり豊かに想像したりする力を高め，創造的に考える力を養う。	同上
古典と文化	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。		
	古典の文章の理解や表現に関する国語の知識や技能を身に付け使うとともに，我が国の言語文化を深く理解できるようにする。	先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で古典の意義や価値について考える力を高め，現代における価値を創出する力を養う。	①様々な文章に触れて自ら進んで考え，理解や解釈、考えを伝え合う過程を吟味しながら，学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，国語を尊重する態度を養う。

（参考）　現行の高等学校 各科目の目標

目標		
言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。		
知識及び技能	**思考力、判断力、表現力等**	**学びに向かう力、人間性等**
生涯にわたる社会生活に必要な国語について，その特質を理解し適切に使うことができるようにする。	生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め，思考力や想像力を伸ばす。	言葉のもつ価値への認識を深めるとともに，言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

現代の国語	言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・ 能力を次のとおり育成することを目指す。		
	実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。
言語文化	言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・ 能力を次のとおり育成することを目指す。		
	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	同上
論理国語	言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・ 能力を次のとおり育成することを目指す。		
	実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	論理的，批判的に考える力を伸ばすとともに，創造的に考える力を養い，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	同上
文学国語	言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・ 能力を次のとおり育成することを目指す。		
	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばすとともに，創造的に考える力を養い，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	同上
国語表現	言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・ 能力を次のとおり育成することを目指す。		
	実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，実社会における他者との多様な関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	同上
古典探究	言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・ 能力を次のとおり育成することを目指す。		
	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，古典などを通した先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	同上

検討項目①　見方・考え方

令和７年１０月１４日
総則・評価特別部会
資料１－１　Ｐ．３
（会議意見反映版）

１．見方・考え方を含む目標の柱書きの示し方と改善の方向性

【現行】各教科等の目標の柱書（例：中学校国語）

言葉による見方・考え方を働かせ(見方・考え方)，言語活動を通して（学習過程），国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力（資質・能力の趣旨）を次のとおり育成することを目指す

【現行の解説】見方・考え方の記述

「対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めること」

＜現行の記述ぶりの課題＞

- 現在，各教科等の目標の柱書には，①見方・考え方，②教科に特徴的な活動，③資質・能力の趣旨が記載されており，冗長で分かりにくいとの指摘。一方，特に「見方・考え方」の具体は解説に落とされており，併せて読まないと分からない。

＜論点整理で示されたこと＞

- 論点整理では，「見方・考え方」を，各教科等を学ぶ本質的な意義の中核に焦点化した上で，その具体を，解説ではなく学習指導要領本体に位置付ける方向性を示している
- また，論点整理では，「見方・考え方」の意義について，「教科固有の様々な世の中を見る視点や考え方が豊かになることで，徐々に資質・能力の育成を導く」といった観点だけでなく，「よりよい社会や幸福な人生に繋げる」ものと位置付けており，学校教育のみならず，その後の人生でも豊かに働くことを視野に入れている

分かりやすく，使いやすいを目指す上で

- 特定の学校種・教科で育成したい資質・能力の趣旨等を端的に表す目標の柱書に，卒業後まで視野に入れた見方・考え方まで含めて書き下すと焦点が定まらなくなる
- 目標の柱書は，育成したい資質・能力の趣旨や固有の学習過程を端的に示すべきであり，見方・考え方は，目標直下に別途欄を設け記載してはどうか

２．１.を踏まえた書きぶり（イメージ）

（目標）

●●する資質・能力（資質・能力の趣旨）について，●●することなどを通して（学習過程），次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能	思考力，判断力，表現力等	学びに向かう力・人間性等

（見方・考え方）

●●（当該教科で扱う事象や対象）を●●（当該教科固有の物事を捉える視点）の視点から捉え（に着目して捉え），●●（当該教科固有の考え方や判断の仕方）すること。

（見方・考え方に含める要素）

- 見方・考え方については，以下のような要素を含めることを基本に，各教科等の特質に応じて検討してはどうか
  - ①　当該教科等が扱う事象や対象
  - ②　当該教科固有の物事を捉える視点
  - ③　当該教科固有の考え方や判断の仕方
- これらの要素を示す事により，教師が児童生徒の学習・指導を構想する際に「教科の本質を外していないか」を確かめられるものとなっているかという視点を大切にすることが重要ではないか

（見方・考え方の書きぶりに共通する留意事項）

- これまで各教科等の見方・考え方の書きぶりで示していた各教科等の深まりの鍵を示す部分は，構造化により示す中核的な概念等を通じて示すこととしているため，新たな見方・考え方の書きぶりについては現在よりも短く端的に示すことを基本としてはどうか
- 当該教科等を学ぶ本質的な意義の中核をわかりやすく示す観点からは，経験の浅い教師が読んでも端的に理解可能な記述となっているかという視点を重視して示し方を検討してはどうか（学習・指導を通じて，最終的に児童生徒が意識できるかという点も留意）

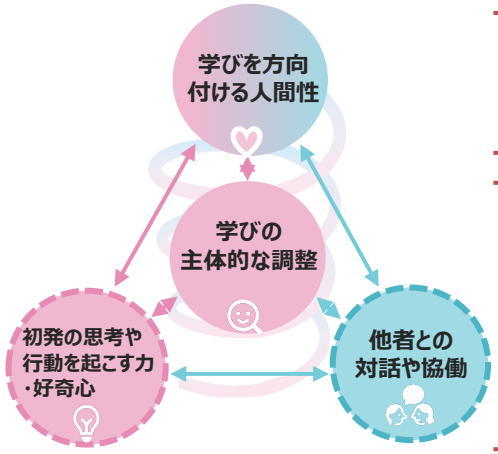
検討項目②　学びに向かう力・人間性等

令和７年１０月１４日
総則・評価特別部会
資料１－１　Ｐ．５
（会議意見反映版）

１．論点整理で示された方向性及び企画特別部会での議論

- 論点整理では、「学びに向かう力、人間性等」について、主要な要素や要素間の関係を構造化して分かりやすく示す観点から、下記の４つの要素により整理する方向性が示された

- 企画特別部会における議論の過程では、「学びに向かう力・人間性等」が単によりよい知の獲得に向けた力としてのみ捉えられてはならず、学習したことを踏まえて人生や社会に向かう際の情意・感性に係る側面も重視すべきとの強い意見があった



【上部】当該教科等の学習で育まれる、人生や社会に向かう際の情意や感性に関わる部分(学習過程で表出しにくい傾向がある内的な側面)

【下部】当該教科等の学習で育まれる、学びに向かう態度に関わる部分(学習過程で表出しやすい傾向がある外的な側面)

- また、論点整理では、「学びに向かう力・人間性等」の学習評価に関し、個人内評価を基本とした上で、学びに向かう態度に関わる下部の３要素については、学習評価において、「思考・判断・表現」の過程で特に表出した場合には「○」をつける方向で検討する」とされている

- 「学びに向かう力・人間性等」は、学習指導要領の「内容」に原則として記載がなく、学習評価に当たっては教科等の「目標」を踏まえて行うこととなるため、そうした点も踏まえた「目標」の書きぶりが重要

※ 現行、各教科等において育成する「学びに向かう力・人間性等」は、個別の学習内容に応じて異なることが想定されにくいため、原則として各教科等の「目標」水準でのみ記載されている。こうした性質は、今回の論点整理に伴って変わるものではない。

２．１．を踏まえた目標における書きぶり

- １．を踏まえると、「学びに向かう力・人間性等」の目標については、全ての要素を個別に盛り込もうとすることで冗長となることを避けつつ、以下の2つの要素をバランス良く含めることとしてはどうか

①　当該教科等の学習で育みたい学びや生活に向かう態度

学びにおいて、好奇心を持って初発の思考や行動を起こし、他者との対話や協働を経ながら、学びを主体的に調整し、次の思考や行動に繋げていく態度について、教科固有の学習過程を踏まえた言葉で示す

（現行の例：自然の事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度（中・理科））

➡学びに向かう態度に係る３つの要素を踏まえた見直し

②　当該教科等の学習で育みたい情意・感性

人生や社会との関わりにおいて育みたい情意や感性を示す

（現行の例：自然を愛する心情（小・理科）、明るく豊かな生活を営む態度（中・体育）など）

- 一方、現行でも、複数分野を有する社会科など、多くの内容が盛り込まれ目標の書きぶりが複雑な教科もある中、分かりやすく使いやすい学習指導要領を目指す上では、今回の見直しで一層複雑となることは避ける必要

- こうしたことを踏まえ、目標については、表形式となることも踏まえ、箇条書きも利用して分かりやすく構造化することを可能としてはどうか（この点は知識及び技能、思考力、判断力、表現力等の目標も同様）

高次の資質・能力の在り方の検討について

議論の前提

これまでのWGにおいて、

- 〔思考力、判断力、表現力等〕の総合的な発揮については、
  小・中学校：領域ごとに示す
  高等学校　:各科目別に領域ごとに示す
- 〔知識及び技能〕の統合的な理解については、
  小・中学校：
  「各領域の学習の過程で生かし深める事項（仮称）」（側面①）は領域ごとに共通で示し、「各領域の学習を支え文化的な知識や態度、教養として深める事項（仮称）」（側面②）は全領域で共通で示す
  高等学校　：
  「各領域の学習の過程で生かし深める事項（仮称）」（側面①）は各科目別に領域ごとに共通とし、「各領域の学習を支え文化的な知識や態度、教養として深める事項（仮称）」（側面②）は全科目共通で示す

という整理をしてきた。（P.33参照）
この整理を踏まえ、高等学校国語科の各科目における高次の資質・能力についてどう示すべきか。

※新科目名は全て仮称

高次の資質・能力の考え方（具体的な論点）

（１）〔思考力、判断力、表現力等〕の総合的な発揮

- 以下の二系統で、科目の特質を踏まえて書き分けることを基本としてはどうか。

・A：主として論理的思考力やコミュニケーション能力を育成する科目の系統
（「現代の国語Ⅰ・Ⅱ」「論説と批評」「対話と表現」）

・B：主として多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を育成する科目の系統
（「言語文化Ⅰ・Ⅱ」「文学と叙述」「古典と文化」）

- その上で、選択（標準）科目（Ⅱの科目）は、必履修科目の学習を基盤として、扱う話や文章及び学習内容の共通性を図りながらより深い理解や高度な表現を目指す内容としていることから、選択（標準）科目の〔思考力、判断力、表現力等〕の総合的な発揮は、必履修科目（Ⅰの科目）との系統性を図りながら資質・能力の深まりを示すこととしてはどうか。
- 選択（発展）科目については、特定の領域や内容に焦点化し、高度かつ専門的な資質・能力の育成を図る科目であることを踏まえ、各科目で育成を目指す資質・能力によって書き分けることとしてはどうか。

（２）〔知識及び技能〕の統合的な理解

①「各領域の学習の過程で生かし深める事項(仮称)」（側面①）

- 〔思考力、判断力、表現力等〕の総合的な発揮と同様に、上記ABの二系統で、科目の特質を踏まえて書き分けることとしてはどうか。
- その上で、必履修科目（Ⅰの科目）と選択（標準）科目（Ⅱの科目）においては、国語科として共通に身に付けるべき言葉の働きや言語文化に関する理解、学習活動を支える基盤的な技能を示すものであるため、共通の文言としてはどうか。
- 選択（発展）科目については、〔思考力、判断力、表現力等〕の総合的な発揮と同様、科目設置の趣旨を踏まえて書き分けることとしてはどうか。

②「各領域の学習を支え文化的な知識や態度、教養として深める事項(仮称)」（側面②）

- この事項で扱う知識及び技能は各科目の学習の基盤となるものであり、国語科全体で共通して深めていく必要があることから、高等学校国語科の全科目で共通の文言として示してはどうか。

（参考）学校種ごとの高次の資質・能力の示し方

※第5回WGで示した案

			話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
小学校	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮		相手や状況，目的に応じて，話し方・聞き方を工夫することにより，考えや思いをよりよく伝えるとともに，他者とのやり取りを通じて自分の考えを捉え直し，広げ深めることができる。	相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，考えや思いをよりよく伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。
	知識及び技能の統合的な理解	側面①	日常生活に必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	日常生活に必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。（再掲）	日常生活に必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		側面②	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値に気付くことが，自己の形成，日常生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。		
中学校	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮		相手や状況，目的に応じて，話し方・聞き方を工夫することにより，考えや思いをよりよく伝えるとともに，他者とのやり取りを通じて自分の考えを捉え直し，広げ深めることができる。	相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，考えや思いをよりよく伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。
	知識及び技能の統合的な理解	側面①	社会生活に必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	社会生活に必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。(再掲)	社会生活に必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		側面②	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。		
高・現代の国語Ⅰ	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮		相手や状況，目的に応じて，話し方・聞き方を工夫することにより，考えや思いをよりよく伝えるとともに，他者とのやり取りを通じて自分の考えを捉え直し，広げ深めることができる。	相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，考えを論拠を明確にして伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。
	知識及び技能の統合的な理解	側面①	生涯にわたる社会生活に必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	生涯にわたる社会生活に必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。（再掲）	生涯にわたる社会生活に必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		側面②	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。		
高・言語文化Ⅰ	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮			相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，思いを効果的に伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。
	知識及び技能の統合的な理解	側面①		生涯にわたる社会生活に必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	生涯にわたる社会生活に必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		側面②		幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。	

【論点２】 科目ごとの高次の資質・能力の示し方①（案）

※具体の文言は今後告示文を検討する中で引き続き精査

			話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
現代の国語Ⅰ	思考力、判断力、表現力等の**総合的な発揮**		相手や状況，目的に応じて，話し方・聞き方を工夫することにより，考えや思いをよりよく伝えるとともに，他者とのやり取りを通じて自分の考えを捉え直し，広げ深めることができる。	相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，考えを論理的に伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。
	知識及び技能の**統合的な理解**	側面①	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。（再掲）	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		側面②	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。		
現代の国語Ⅱ	思考力、判断力、表現力等の**総合的な発揮**		相手や状況，目的に応じて，話し方・聞き方を工夫することにより，考えや思いを効果的に伝えるとともに，他者とのやり取りを通じて自分の考えを捉え直し，広げ深めることができる。	相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，考えを論理的かつ効果的に伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解したことを踏まえて自分の考えを吟味し再考することができる。
	知識及び技能の**統合的な理解**	側面①	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。（再掲）	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		側面②	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。		
論説と批評	思考力、判断力、表現力等の**総合的な発揮**			相手や状況，目的に応じて，考えや意見を効果的に論述することができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，他者の思考の妥当性を吟味し，自分の考えを省察することができる。
	知識及び技能の**統合的な理解**	側面①		学術的な学びの基礎に係る事柄に関する言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	学術的な学びの基礎に係る事柄に関する言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		側面②		幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。	
対話と表現	思考力、判断力、表現力等の**総合的な発揮**		相手や状況，目的に応じて，話し方・聞き方を工夫することにより，効果的に対話し他者と協働することできる。	相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，考えや思いを効果的に表現することができる。	
	知識及び技能の**統合的な理解**	側面①	多様な他者との多角的な関わりに必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	多様な他者との多角的な関わりに必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。（再掲）	
		側面②	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。		

【論点２】　科目ごとの高次の資質・能力の示し方②（案）

※具体の文言は今後告示文を検討する中で引き続き精査

			書くこと	読むこと
言語文化Ⅰ	思考力、判断力、表現力等の**総合的な発揮**		相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，思いを感性豊かに伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。
	知識及び技能の**統合的な理解**	側面①	我が国の言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	我が国の言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		側面②	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。	
言語文化Ⅱ	思考力、判断力、表現力等の**総合的な発揮**		相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，思いを感性豊かかつ効果的に伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて批評し，自分の考えを広げ深めることができる。
	知識及び技能の**統合的な理解**	側面①	我が国の言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	我が国の言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		側面②	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。	
文学と叙述	思考力、判断力、表現力等の**総合的な発揮**		相手や状況，目的に応じて，思いをもとに言葉で豊かに創作することができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて批評し，自分の考えを吟味し再考することができる。
	知識及び技能の**統合的な理解**	側面①	創作に係る事柄に関する言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	創作に係る事柄に関する言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		側面②	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。	
古典と文化	思考力、判断力、表現力等の**総合的な発揮**			状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて古典の価値を見出し，自分の考えを広げ深めることができる。
	知識及び技能の**統合的な理解**	側面①		我が国の伝統的な言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		側面②		幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。

資質・能力の構造化の状況を踏まえた更なる検討の方向性（案）

- 各WGにおける資質・能力の構造化の検討状況を一覧化し、本部会の論点整理で示した資質・能力の構造化の趣旨や、総則・評価特別部会で整理したチェックポイント等を踏まえ検討したところ、以下１～７については共通して精査を要するのではないか

✓これら以外に、各WGに対して個別に指摘すべき事項や、各WG共通で検討を要する事項はないか

✓本日の議論を踏まえて、引き続き総則・評価特別部会や各WGにおいて資質・能力の構造化の具体についてさらに検討を深めることとしてはどうか

１．資質・能力の深まりの可視化

- 今般の構造化を通じ、「深い学び」が実現したイメージを教師が具体的に持つことができるようにすることが重要。（【資料１】P６　総則・評価特別部会「チェックポイント」B関連）
- こうした視点で見た際に、抽出された「高次の資質・能力」のうち特に「統合的な理解」については、依然として個別の知識及び技能が不足なく身に付いた状態を「要約」して示すに留まっているものも見られる。
- 個々の知識・技能が単に網羅されているかではなく、「指導を通じて学びが深まったときの児童生徒の姿をイメージできるよう的確に示せているか」といった観点から、各WGで記載を見直し、個別の知識や技能が相互に関連付けられて一般化され、「統合的な理解」となった児童・生徒の姿を描き出せるよう更に検討すべきではないか。

２．分かりやすさ、シンプルさの一層の追究

- 「深い学び」を実現する具体的なイメージを持つことができるようにするためには、学習指導要領の記述が、教師にとって分かりやすく、学校を通じて保護者や地域住民等に伝えやすいものであることも重要。（【資料１】P６　総則・評価特別部会「チェックポイント」D関連）
- こうした視点で見た際に、整理されている「見方・考え方」や「高次の資質・能力」の中には依然として記載が冗長であったり、理解が難しい用語を用いて表現されているものも散見される。
- 各教科等の本質や育みたい資質・能力を十分に表現可能な範囲において、解説との役割分担も含め（教科等の本質的な意義に焦点化できているかという視点から精査）、一層分かりやすくシンプルに示すことが可能かどうか、引き続き各WGで検討してはどうか。

３．「高次の資質・能力」を踏まえた個別の資質・能力の精査

- 総則・評価特別部会においては、「高次の資質・能力」の全体を暫定的に整理した後、それらを基に各教科等WGにおいて個別の資質・能力の検討を行う際の方向性として以下を示した。（【資料１】P７）

「各教科等WGにおいて、整理した「高次の資質・能力」に基づき、より豊かな学習活動に繋がり、かつ、系統性等を損なわない範囲で、精選が可能な対象を慎重に特定しつつ、個別の資質・能力の整理を検討する。その際、表形式での示し方、「高次の資質・能力」の獲得に向けて「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るための余白が十分にあるかといった視点からも検討」

- 今後、上記の方向性に加え、下記の留意点も踏まえつつ、各教科等WGで個別の資質・能力の整理と必要に応じた精選の検討を進めてはどうか
  - ✓ 暫定的に現行学習指導要領の内容に基づき、高次の資質能力を整理してきたWGもあることから、今後の検討にあたっては、現行の指導内容が全て等しく重要であると安易に判断しないように留意する必要
  - ✓ 個別の資質・能力を検討していく中で「高次の資質・能力」の在り方についても往還しながら更に改善を図っていく必要

その他「高次の資質・能力」での構造化に当たり留意すべきポイントについて

（「高次の資質・能力」について）

- 単学年ごとに「高次の資質・能力」を示している場合などで、「高次の資質・能力」が個別の内容事項と近接してしまい資質・能力の深まりが示せていないものもあり、そういった場合は複数の「高次の資質・能力」をまとめて水準を上げることも考えられるのではないか

- 特に「総合的な発揮」については、学びの成果として達成して欲しい姿として重要であると同時に、学習過程において、状況に応じて思考力・判断力・表現力を選択したり組み合わせたりしながら、繰り返し発揮される中で育成されていく側面を有するという視点も踏まえた示し方とすべき（一方、学習過程自体を記述するものではないことに留意が必要）

- 「高次の資質・能力」については、深い学びを実現する授業のイメージを教師が持てるようにする視点に加えて、児童生徒の多様性を包摂する授業づくりを進めるために活用するという視点も重要。このため、児童生徒の多様性を踏まえた多様なアプローチが許容されるものとなっている必要があり、そのためにも、特定の活動を想起させる狭い記載ではなく、できる限りスリムで骨太な記載とすべき

（学校段階の特性を踏まえた共通性の確保について）

- 多くの教科を指導する小学校の教員から見ると、教科間の記載にばらつきが大きすぎると理解が進まない恐れ。各教科等の特性を踏まえつつも、各学校段階では一定の共通性を持って見られるよう抽象度の高さを含め一定の平準化が必要。他の学校段階や他教科等の表現も参考にしつつ、当該学校段階の発達段階を踏まえた「深い学び」の姿を具体的にイメージできるようになるかという共通の視点をもって検討が必要

（資質・能力の３つの柱の性質を踏まえた整理について）

- 並列パターン、並行パターンといった形式上の違いはあれど、資質・能力の整理は本質的なところで共通している必要。特に「思考力・判断力・表現力等」については、これまでに習得した知識や技能を活用して、実社会・実生活などの場面を想定した課題解決に近い形で資質・能力を発揮するという性質の柱であり、「知識及び技能」とりわけ技能との適切な整理が必要。「学びに向かう力・人間性等」は「思考力・判断力・表現力等」の中で見取る方向で検討していることも踏まえ、異なる整理をしている教科においては、引き続き検討が必要

４．今般の構造化を単元・授業づくりに活かすプロセスの可視化

- 「高次の資質・能力」を基にした今般の構造化・表形式化は、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」について学びの深まりを可視化するとともに、それらを一体的に育成する学習の在り方を示し、教師一人一人が「深い学び」を具現化しやすくすることを目指すもの。
- 一方で、整理・構造化された資質・能力について理解を深めることと、それらを活用して実際の単元・授業づくりに活かすこととの間には依然としてギャップがあるものと考えられる。「資質・能力」の深まりを捉えた後、それを実現する単元・授業をどのように構想し、実践に繋げていけばよいかを考えることは、特に経験の浅い教師にとっては、難しい場合もある。
- そのため、構造化・表形式化する学習指導要領について、単元・授業づくりのどういった場面でどのように活用することで授業改善に繋げていくことができるのか、各教科等ごとに参考イメージを示すことにより、指導主事や経験が豊かな教師が、経験の浅い教師を指導する際のイメージを共有でくるようにすることを検討してはどうか。　（補足イメージ参照）

※　このことに関わって、前回改訂時の中教審答申においては各教科等固有の「深い学び」を実現する学習過程を精緻に示す試みが行われたが、多くの要素が盛り込まれ、教科等によっては複雑で実現が難しいものとなったとの指摘もある。また今般、個別最適な学びの実現の観点も踏まえ、「個に応じた学習過程」の充実を目指すこととしている。これらを踏まえると、今回は単一の学習過程を整理するのではなく、子供一人一人が深い学びを実現するための専門職としての教師の多様な単元・授業づくりを支えるという視点から、上記のように、構造化・表形式化された学習指導要領の活用イメージとして、参考資料を示すことが適当ではないか。

※　その際、このイメージはあくまでも参考の一つとして示し、現場の実践を過度に縛るものにならないよう留意が必要。実践者が子供の実態を踏まえて、多様で豊かな単元・授業づくりを行う際の足掛かりの一つと位置づけてはどうか。

５．用語の一層の整理・検討（高次の資質・能力）

- 企画特別部会では、今回の学習指導要領の一層の構造化の核となるものとして、「知識及び技能」の深まりを示すものを「中核的な概念の深い理解」、「思考力・判断力・表現力等」の深まりを示すものを「複雑な課題の解決」と仮称し、それらをまとめて「中核的な概念等」と呼んで整理していたところ。
- これらの用語について、総則・評価特別部会では、新たな用語が増えることを避け、一人一人の教師が現行の学習指導要領の延長線上に今回の構造化を理解することができるようにする観点から、資質・能力の深まりを示すものを「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」、それらをまとめて「高次の資質・能力」と呼ぶことと整理した。　（【資料１】P３参照）
- 「統合的な理解」「総合的な発揮」の呼称については、今回の構造化の趣旨の理解を進める上で効果的に働いている一方、「高次の資質・能力」という語については、各教科等WGでは、学校現場には単に「レベルの高い高度な資質・能力」として受け取られる等の誤解を招くのではないかといった懸念もあったところ。
- こうしたことも踏まえ、「高次の資質・能力」という用語については、今回の構造化を検討・議論する上の「足場」としては重要であり引き続き使用することとしつつも、実際に学習指導要領を告示する段階に向けて、更に適切な語があればそれを用いることとするか、または告示文の中ではあえて用いない（「統合的な理解」「総合的な発揮」のみで説明）こととしてはどうか。

６．趣旨を実現するための教科書の在り方の更なる検討

- 企画特別部会の論点整理においては、今般の構造化の趣旨を踏まえて教科書の内容は「統合的な理解」「総合的な発揮」をつかみ取りやすくなるものに精選していくとともに、その分量の在り方に関しては、調整授業時数制度の下で、調整後の時数で十分に指導可能なものとなるよう検討すべきとの方針を示している。

- 一方で、教科書会社からは、そうした「高次の資質・能力」をつかみ取りやすい教科書は具体的にどのようなものかイメージが湧きにくいという声もあり、総則・評価特別部会においては、各教科等WGにおいて「高次の資質・能力をつかみやすい当該教科等の教科書の在り方について、内容の精選の在り方も含めて検討を行う」方針が示されているところ。（【資料１】P７）

- これらの方針を踏まえつつ、各教科等WGにおいては、
  - ３．に示す個別の資質・能力の整理と必要に応じた精選の検討を着実に進めていくとともに、
  - 「高次の資質・能力」をつかみ取りやすい単元・授業づくりに資する観点から、現在の教科書のどういった内容を精選対象とすることが考えられるか、またどういった構成上の工夫が考えられるかといった点についてのアイデア出しを行い、教科書会社における教科用図書の編纂の参考となるよう検討を進める

  こととしてはどうか。

- 中央教育審議会におけるこれらの検討状況も踏まえつつ、調整授業時数制度を活用して標準を下回って時数を設定した後の授業時数でも、教科用図書の内容を適切に取り扱った指導が可能となるような教科書編纂を促すための仕組み作りなどについて、検定調査審議会において具体的に検討することとしてはどうか。

７．構造化・表形式化・デジタル化・調整授業時数・個に応じた学習過程の関係性の整理

- これまで、学習指導要領の構造化・表形式化と、デジタル化、調整授業時数制度をはじめとする柔軟な教育課程編成を促す仕組み、個に応じた学習過程の充実については、それぞれ一定の検討時間を要するものであったため、トピックを分けて具体化の議論を進めて来た。

- もとより、これらの方策はいずれも密接に関連している（※）ものであることから、トピックごとに一定の具体化が進んできた現段階において、相互の関係を改めてしっかりと可視化し、学校現場が一体的に理解できるよう示していくことが重要ではないか。

（※）相互の密接な関連の例

・「高次の資質・能力」に基づく構造化・表形式化は、各教科等の「深い学び」を実現しやすくするために重要であるだけでなく、各学校が子供の実態に応じた柔軟な教育課程を編成したり、個に応じた多様な学習過程を充実する中にあっても、外してはならない教育課程の「軸」を明確化する役割も有している。

・「高次の資質・能力」で示した教育課程の「軸」をおさえつつ、子供の実態に合わせた柔軟な教育課程を編成・実施していく上では、系統性を確保しながら多様な実践アイデアを練る必要がある。このため、学習指導要領に示された内容を様々な角度から比較・参照して理解することや、データで出力して進度管理に活用することを可能とするなど、学習指導要領のデジタル化による利便性の向上・活用幅の拡大が効果的と考えられる。

・多様な子供一人一人に深い学びを実現していくためには、調整授業時数制度を用いて学校レベルでの教育課程を柔軟化することも重要であるが、その先に個々の児童生徒のレベルでの学習過程の質が個に応じたものとして改善していくことが求められる。そのためには、学習方略の指導等を含め、個に応じた学習過程の充実を支える方策の充実が重要となる。

- そのため、今後総則・評価特別部会において、これらの方策がどのように相互に関連しているかを一層明らかにしつつ、その結果としてどのような単元・授業づくりを目指そうとしているのかを取りまとめにおいて可能な限り示していくことが考えられるのではないか。

高次の資質・能力の案

令和８年２月９日
教育課程部会
第５回国語ワーキンググループ
資料１　ｐ．１１

【改訂案の検討ポイント】

＜思考力，判断力，表現力等の総合的な発揮、知識及び技能の統合的な理解　共通の検討ポイント＞

- 「目的などに応じて」と示していた部分を、より具体に示す観点から、「**相手や状況，目的に応じて**」（話すこと・聞くこと／書くこと）、「**状況や目的に応じて**」（読むこと）としてはどうか。（小・中・高共通）
- 資質・能力の柱ごとの目標において、学習の対象となる国語については、**小学校では「日常生活」**、**中学校では「社会生活」**、更に**高等学校では「生涯にわたる社会生活」**として位置付けているという整理を踏まえ、高次の資質・能力についても、校種ごとの目標に応じてその深まりや広がりが適切に表現されるように整理してはどうか。
- **第４回WGで示した思考力，判断力，表現力等の総合的な発揮の記載**について、学習で扱う内容が中心となっていた記載を見直し、**相手・状況・目的を踏まえて話し方・書き方・読み方を工夫・調整**することを軸として、小学校段階では「他者とのやり取りを通じて自分の考えを捉え直し，広げ深める」（話すこと・聞くこと）、「考えや思いをよりよく伝えること」（書くこと）「理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを広げ深めること」（読むこと）と整理し、学校種に応じて高次の資質・能力が明確になるよう示してはどうか。

【企画特別部会における整理を踏まえた検討ポイント】

第14回教育課程企画特別部会（令和８年2月２日開催）において、各WGにおける資質・能力の構造化の検討状況の一覧が示され、論点整理で示された資質・能力の構造化の趣旨や、総則・評価特別部会で整理したチェックポイント等を踏まえた検討がなされたところ、以下の７つの観点については共通して引き続き精査を要すると整理されている。
そのうち、「高次の資質・能力」の検討に当たって特に関連の深い観点（項目１，２）を踏まえ、改めて検討いただきたい。
【P.12～15参照】

１．資質・能力の深まりの可視化
２．分かりやすさ、シンプルさの一層の追究
３．「高次の資質・能力」を踏まえた個別の資質・能力の精査
４．今般の構造化を単元・授業づくりに活かすプロセスの可視化
５．用語の一層の整理・検討
６．趣旨を実現するための教科書の在り方の更なる検討
７．構造化・表形式化・デジタル化・調整授業時数・個に応じた学習過程の関係性の整理

高次の資質・能力の示し方及び内容の考え方

論点３ 「高次の資質・能力」の在り方

高次の資質・能力の示し方（第３回WGで審議）

- 高次の資質・能力、資質・能力（思考力・判断力・表現力等／知識・技能）の系統的な発展をわかりやすく提示するために、
  - ➢ 高次の資質・能力、言葉を使う目的（仮称）や事項のまとまり（仮称）、資質・能力の関係性を整理して示してはどうか
- また、学校段階や学年、科目など、どのような単位で高次の資質・能力を示すかについては、
  - ✓ 小・中学校は学校修了段階で獲得してほしい高次の資質・能力を示すことができるが、
  - ✓ 高等学校は学校・生徒によって履修する科目及び履修する学年等が異なる

  ことから、

【思考力、判断力、表現力等】
- ➢ 小・中学校については、領域ごとに示し、高等学校については、各科目別に領域ごとに示すこととしてはどうか

【知識及び技能】
- ➢ 小・中学校については、①領域ごとに共通の内容と、②全領域で共通の内容で示し、
- ➢ 高等学校については、各科目別に、①領域ごとに共通の内容と、②全領域で共通の内容で示すこととしてはどうか

高次の資質・能力の内容（第３回WGで審議）

- 高次の資質・能力については、
  ① 国語科の目標や本質的な意義から演繹的に導かれる側面と、
  ② 個別の学習内容をより深く習得するために帰納的に導かれる側面
  の２つがあることを踏まえて設定してはどうか

小中高の校種を踏まえた高次の資質・能力の内容の考え方（今回追加の視点）

- 国語科の指導内容は系統的・段階的に上の学年に繋がっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、資質・能力の定着と深化を図ることを基本としている。このため、教科等の本質的意義の中核である「見方・考え方」は、小・中・高等学校を通じて共通に位置付けつつ、それを踏まえた<u>高次の資質・能力については、発達の段階や校種ごとの目標に応じて、その深まりや広がりが適切に表現されるよう整理する</u>こととしてはどうか。
- 高等学校については、各科目の学習の意義を踏まえて、科目の深い学びが明確となる表現としてはどうか。